

(特別) 音楽鑑賞会 (9月26日 紀尾井ホール)

国際アマチュアピアノコンクール

9月26日(土)に、恒例の日唄文化協会主催「国際アマチュアピアノコンクール」の2020年本選が紀尾井ホールで開催された。開演の午前10時30分には、霧雨の天候にも拘わらず多くのファンが席に着いている。アイアン・クラブ関係者も6名の方が参加された。

このコンクールは、日本とオーストリア(唄)との文化交流に力を入れる日唄文化協会の主要事業の一つである。オーストリアといえば「音楽の都・ウィーン」が直ぐに思い浮かぶ。ウィーンを中心に活躍した音楽家を挙げれば、モーツァルト、ベートーヴェン、シューベルト等々、枚挙に暇がない。このコンクールでも、これらの作曲家の作品が多く演奏される。

さて、コンクールのシステムの概要を記すと、まず「アマチュア」の定義だが、これは「18歳以上の経歴で音楽の専門教育機関で学んでいない方」となっている。しかし、本選に出て来る演奏者は大宗ごく幼少の頃から音楽の手ほどきを受けており、実態としては、音楽大学への進学者とキャリアには余り大きな差異はないのではないかと感じる。

選考には3つのグループがある。18歳~55歳未満の年齢層は「A部門(全て暗譜で演奏)」「B部門(視奏可)」に分れている。55歳以上は「シニア部門」。本年のグループ別の応募及び本選出場者数は次のようになっている。

(単位:名)

部 門	第1次予選 (全応募者) (9月5・6日)	第2次予選 (9月20日)	本 選 (9月26日)
場 所	杉並公会堂		紀尾井ホール
A部門	33	19	10
B部門	47	20	8
シニア部門	16(本選扱い) → (最優秀1名・優秀2名選出完了)		
計	96	39	18

A・B部門で本選に「ファイナリスト」として登場してくる演奏者は、このような激戦を勝ち抜いてきた方々だが、これは出場者の演奏技術の高さに触れて、直ぐに

納得させられる。専門家の評価基準からすれば優劣があるのだろうが、筆者のような素人の耳には「この人、職業ピアニストじゃないの?」とってしまうような方が少なくない。しかも、プログラムに記載された出場者の



経歴を拝見すると、会社や官庁の中堅幹部・医師・大学教授・主婦など実に幅広い分野の職業人だ。また年齢層も現役学生から定年退職された方まで、更に居住地も日本全国からと、大変バラエティーに富んでいる。こうしてみると、日本の音楽文化も成熟しているのだなあ、と感じ入ってしまう。

「ピアノのコンクール」と聞くと、筆者は、数年前に話題になった『蜜蜂と遠雷』(恩田陸・著、2016年、映画化(2019年))のプロ・ピアニストの激しい競争の世界を思い出してしまうが、この「アマチュアピアノコンクール」は、「競争」と同時に、出場者にとっては「コンサート」でもあるのだろうと感じられる。A・B部門の「ファイナリスト」として本選に勝ち残り、また「シニア部門」の優秀者として、紀尾井ホールのステ



ージに立ち、紀尾井のピアノ(Steinway & Sons)を弾く。これは、普通に出来る事ではない。文字通り「晴れ

舞台」である。

これは、「アマチュア」の世界が、プロよりも「甘い」世界だ、と言っているのではない。プロのコンクールは、極論すれば、いわば自分の演奏が、「不特定の聴衆」という市場でどのくらい高く評価されるか、という競い合いなのだと思う。一方、ここ紀尾井のステージに立っている出場者が目指しているのは、「自分の知人、或いは、自分でイメージできているグループの人達」という「特定の聴衆」に喜んで貰いたい、もう一つは「自分が、精一杯やった」という納得感を得たい、ということだと思ふ。そして、そうした喜びを糧として、更なる高みに挑んでゆく勇気を得ることだ。だから、ピアノの演奏に「努力する」程度はプロと変わらぬ位、全身全霊をかけてやってこられたのだ。そうでなければ、高度な演奏技術で独自の音楽解釈を表現したあれほどの見事な演奏はできはしない。だからこそ、この紀尾井のステージは出場者にとって「コンクール」であると同時に「コンサート」なのである。

本選は午前中がB部門8名、午後がA部門10名の演奏が、途中で休憩を挟みながら、次々と進み、15時過ぎに18名全ての演奏が終了した。熱のこもった演奏の連続に、時間の長さを覚えることはなかった。

この本選の演奏が全て終わった後、記念演奏として、「シニア部門」の最優秀1名・優秀者2名、及び昨年(2019年)のA部門1位受賞の3名(同位受賞)、計



6名の方々の見事な演奏が披露された。

休憩の後、16時過ぎから、A・B各部門から各々1・2・3位の受賞者が発表され、またその他の方々に「入選者」「ファイナリスト賞」の栄誉が授与された。



表彰式の後、日唄文化協会の中川秀直名誉会長(元・衆議院議員)の挨拶の後、審査結果に付き審査員団5名を代表して講評を行った審査副委員長・北川暁子氏(東京藝大名誉教授)が、「演奏を聴いていて、自分たち音楽家の音楽に対する見方が、実は一面的だったのではないか。音楽以外の多くの分野で活躍しておられる方々による音楽に対する多面的な視点を、もっと参考にすべきではないかを感じる」という趣旨のコメントをされた。筆者は、これを、この「アマチュアピアノコンクール」の大きな意義として聴いた。

今年は、コロナ禍もあり、この本選の実施に漕ぎ付けるには、関係者には多くのご苦勞があったとの言葉が、主催者からのご挨拶でも、一度ならず聞かれた。その障

害を克服して本選の実現をみたことは、出場者にとっては「特定の聴衆」との紐帯と、自己の納得感を再確認し、そこから更なる挑戦へ始動する場が与えられたことを意味する。筆者は、これこそ「コロナ禍」を打ち負かすことだと思う。今年の本選実施は、こうした意味で、特筆すべき快挙であったと感じる。

(保倉 裕・記)